

特集号 感性・認知・記憶

この特集号を組むにあたり、執筆者一同で何度か研究会を開いた。各人の研究についての様々な意見が飛び交う中、執筆者一同の間には暗黙の了解があったように思う。それは、人間の感性・認知・記憶の諸機能は極めて多岐にわたり、新たなテクノロジー・新たな表現の出現とともにその領野を刻一刻広げつつもあり、このためそれらの研究も、必ずしも心理学の枠にとらわれることのない様々な視点からの日常の行動の分析となるというものであったように思う。この暗黙の了解が予感させる豊かさが具体的なものであることは、執筆者たちによる以下の様々な試みが如実に示しているように思われる。

まず最初の雨宮、住山&増田の「マンガ表現の時空（1）－レイヤー分解・少女漫画のコマ・マンガ表現の感性認知記号論－」は、心理学、メディア論、感性認知記号論の諸視点からマンガ表現の全体的特徴を分析を試みた大作である。次の池田&梅津の「ぱらぱらまんがについて－視的運動事態に見る知覚諸相－」は、ぱらぱらまんがの意味的なおもしろさではなくもっと直感的なおもしろさはなにかということの考察である。この考察とあわせて、本号ページ隅（105ページから267ページ）に印刷された「ぱらぱらまんが」を実際に試して、画像の動きのおもしろさを体験してほしい。第3の関口の「忘れられた名前、忘れられた出来事－遠隔記憶検査作成の試み1－」は、有名人の顔写真や事件や出来事を写した報道写真を用いた遠隔記憶検査の作成を試みた。第4の池田、内藤&打田の「顔でウソをつかないで！－偽装検出に関する実験－」は、不快な感情を隠し快的な様子であるふりをするという偽装された表情を正直な表情と区別して検出できるかどうかを調べた。第5の池田、鈴木&倉田の「へなへなエンピツ－視的撓いの発生についての考察－」では、ラバーペンシル・イルージョンと呼ばれている錯視現象に関する研究を紹介し、視覚的撓いの発生についての考察を試みた。第6の関口の「『私の記憶』と『私についての記憶』－自伝的記憶検査作成の試み1－」では、自伝的な記憶の検査方法について紹介し、簡便な自伝的記憶検査方法の作成を試みた。最後の雨宮&水谷の「はいそうですね－声の印象の分析の試み－」は、声調（ヴォーカリックス）と呼ばれる周辺言語に着目し、「はいそうですね」という音声を用いて、その音声が特定の感情を伝えられるかについての調査を試みた。

これらの様々な研究が、読者のみなさんの人間の感性・認知・記憶の諸機能に対する認識を深め、また、さらなる研究へと乗り出されることのきっかけとなれば幸いです。

関口 理久子